

〈研究・調査報告〉

W.G.アストンの『日本口語小文典』における名詞と代名詞の説の発展 —初版と第2版の比較から—

吉 田 朋 彦

【要旨】

W. G. アストン (William George Aston, 1841-1911) の『日本口語小文典』(*A Short Grammar of the Japanese Spoken Language*) の初版と第2版における名詞と代名詞の章を比較した。その結果、名詞と人称代名詞、指示代名詞(指示詞)にアストンの説の改訂があったことを明らかにした。名詞の記述では、初版の「接頭辞」と「接尾辞」が「小辞」としてまとめられ、特に名詞に後接する小辞は文法機能を重視した記述に改訂されたことなどを示した。人称代名詞については、初版と第2版では各人称の用語が異なること、会話参加者の社会的関係についての加筆があった。指示代名詞については、第2版で「二人称の指示代名詞」「三人称の指示代名詞」という分類がなされた。また、照応用法と間投詞的用法が新たに追加され、ソ系とア系の対立が、空間的位置と、可視・不可視、会話の主題かどうかという対立に改められた。

キーワード：Aston、アストン、日本口語小文典、人称代名詞、指示詞、指示代名詞

1. はじめに

ウィリアム・ジョージ・アストン (William George Aston, 1841-1911) は、日本語の口語の文典を4冊公開している。最初のもは、『日本口語小文典¹』(*A Short Grammar of the Japanese Spoken Language*, Aston 1869)である。その後、1871年にその第2版 (Aston 1871) が、1873年に第3版 (Aston 1873) が発行される。そして、口語の文典の最後のものが、表紙に‘FOURTH EDITION.’と記された『日本口語文典』(*A Grammar of the Japanese Spoken Language*, Aston 1888)である。本稿では、これら四つの版をまとめて『口語文典』と呼ぶ。また、周知のとおり、アストンは、文語の文典『日本文語文典』(*A Grammar of the Japanese Written Language*, 以下『文語文典』)を著わし、初版から第3版まで三つの版がある。

本稿の目的は、『口語文典』初版と第2版における名詞と代名詞の章を、名詞と代名詞の記述の変化に着目して検討し、その改訂の要点を報告することである。版の違いについての研究はすでにあり、初版から第3版までの異同は渡邊 (1984) が明らかにしている。それに対

し、筆者の関心は、アストンの名詞と代名詞の記述の変化と発展、すなわちアストンが日本語の名詞と代名詞をどのように捉え、どのように発展させていったかを考察することにある。そのための準備として筆者はまず、初版から第4版までの名詞と代名詞に関する章、つまり初版から第3版までの第2章と第3章、第4版の第3章と第4章を比較した。その結果、第2版と第3版の相違点はわずかであり、初版と第2版（あるいは第3版）、第4版の三つを比較すればよいことが確認できた²。そして、第4版は、第3版との差が大きく、『文語文典』第2版の影響もあることも確認した。そこで本稿では、初版と第2版を対象とし、第3版、第4版、『文語文典』初版（Aston 1871）と第2版（Aston 1877）への言及は最小限に止めることにした。また、筆者は、初版における名詞と代名詞について若干の考察をしたことがある（吉田 2008）。そのため本稿では、初版から第2版への推移に重点を置くことにした。

これまで、アストンの『口語文典』についてさまざまな視点から研究がなされてきた。『口語文典』初版については、渡邊（1975、1982）が書誌の考察と初版影印の紹介を行っている。上述の通り、渡邊（1984）は、『口語文典』の初版と第2版、第3版の異同を明らかにした。古田（2010a）³は、アストンの指示詞の説の形成を、『文語文典』すべてと『口語文典』第3版と第4版に基づいて論じた。杉本（1999）は、初版を概観し、本稿の目的である名詞と代名詞の記述に関わるところでは「は」と「が」について、また、動詞と形容詞の活用について、第2版と第4版に言及しつつ述べている。それゆえ、『口語文典』における名詞と代名詞の記述全体を検討する余地はある。

その他、本稿の対象とは異なる研究に、アストンの品詞分類と動詞の活用（古田 2010b）、『口語文典』第4版の性格と章立て、品詞論（加藤 1986）、敬語の説（古田 2010c、青木 2018）、章と例文の追加をもとにした考察（今村 2018）、アストンの『口語文典』とアーネスト・サトウの『会話篇』の例文の共通性の指摘（今村 2020）、外国人による日本語文法研究史におけるアストンについての考察（金子 2002）がある。

以下、最初に『口語文典』初版と第2版の構成について述べ、その後、名詞、代名詞、指示代名詞、疑問代名詞・不定代名詞・再帰代名詞・関係代名詞の順で検討する。

2. 『口語文典』第2版における名詞と代名詞

2.1 初版と第2版の構成

『口語文典』初版と第2版は14章で構成されている。各章の題名は表1のとおりである。題名は、目次名と本文中とで異なっていることがあり、表1にその両方を示す。本稿で章名に言及するときは、本文中の題名を使用する。第3版の章構成は第2版と同一である。

表1 アストン『口語文典』初版と第2版の構成

	初版	第2版
CHAPTER I.	The Alphabet—Pronunciation	The Alphabet—Pronunciation
	THE ALPHABET.—PRONUNCIATION.	THE ALPHABET.—PRONUNCIATION.
CHAPTER II.	Noun—Particle	Noun—Particle
	THE NOUN.	THE NOUN.
CHAPTER III.	Pronoun	Pronoun
	THE PRONOUN.	THE PRONOUN.
CHAPTER IV.	Numeral	Numeral
	NUMERALS.	NUMERALS.
CHAPTER V.	Adjective	Adjective
	THE ADJECTIVE.	THE ADJECTIVE.
CHAPTER VI.	Verb	Verb
	THE VERB.	THE VERB.
CHAPTER VII.	Adverb	Adverb
	THE ADVERB.	THE ADVERB.
CHAPTER VIII.	Preposition	Preposition
	THE PREPOSITION.	THE PREPOSITION.
CHAPTER IX.	Conjunction	Conjunction
	THE CONJUNCTION.	THE CONJUNCTION.
CHAPTER X.	Interjection	Interjection
	INTERJECTIONS.	INTERJECTIONS.
CHAPTER XI.	Order of Words in Sentence	Order of Words in Sentence
	ORDER OF WORDS IN A SENTENCE.	ORDER OF WORDS IN A SENTENCE.
CHAPTER XII.	Division of Time	Division of Time
	DIVISION OF TIME.	DIVISION OF TIME.
CHAPTER XIII.	Money, Weights and Measures	Money, Weights and Measures
	MONEY, WEIGHTS AND MEASURES.	MONEY, WEIGHTS, AND MEASURES.
CHAPTER XIV.	Common Errors in Speaking Japanese	Common Errors in Speaking Japanese
	COMMON ERRORS IN SPEAKING JAPANESE.	COMMON ERRORS IN SPEAKING JAPANESE.

(各章の上段は目次、下段は本文中の題名)

出典 Aston (1869、1871) から筆者作成

各章の下には節があり、通し番号が付けられている。節は、初版では 81 節、第 2 版と第 3 版には 108 節ある。節は、目次には記載がなく、本文中で「§」を用いて記されている。

2.2 名詞の記述の改訂—「接頭辞」「接尾辞」と「小辞」

2.2.1 第 2 章の構成と改訂箇所

第 2 版第 2 章 ‘THE NOUN.’（「名詞」）は、初版の第 2 章 ‘THE NOUN.’（「名詞」）が改訂されたものである。初版は 4 節構成、第 2 版は、内容が細分化され、8 節構成となっている（表 2）。

表 2 『口語文典』初版と第 2 版第 2 章の構成

初版第 2 章		第 2 版第 2 章	
§4	[名詞の語構成] *1	§4	[名詞の語構成]
§5	Prefixes. [「お」「ご」、性] *2	§5	Gender.
§6	Affixes. [「は」「が」「の」「に」「を」「で」「か」「と」「も」「から」「より」「まで」「ら」「がた]	§6	[複数の表示とその形式]
		§7	[「は」]
		§8	[「の」「が」]
		§9	[「に」]
		§10	[「を」]
		§11	[「で」]
§12	[「か」「も」「で」「から」「より」「まで」]	§12	[「か」「も」「で」「から」「より」「まで」]
§7	Examples of Compound Nouns	§13	Examples of Compound Nouns.

*1 題名のない節には、筆者がその節の概要を〔 〕で示した。

*2 [] は筆者による補足。

出典 Aston (1869, 1871) から筆者作成

いずれの版でも、名詞の記述は語構成論である。その内容は、名詞の語構成（初版第 6 節、第 2 版第 12 節まで）と、複合名詞の語構成（第 7 節、第 13 節）である。

名詞の語構成の特徴については、第 4 節が概観、それ以降が名詞の前接要素と後接要素の具体的な記述である。現代の日本語文法と異なるのは、後接要素に「ら」や「がた」などの接尾辞だけではなく、「は」や「が」などの助詞も含まれている点である。

第4節の内容は、初版も第2版も変わらない。日本語の名詞の特徴として、単複・性・格を示す「活用 (inflection)」がなく、その代わりに、名詞に前置あるいは後置される「小辞 (particle)」がその役割を果たすとされる (初版 p. 6、第2版 p. 2)。

初版の第5節と第6節では、「お (御)」や「は」など名詞の前後に位置する要素の記述が続く。そこが、第2版で改訂される。その要点は、初版の ‘prefix’ (「接頭辞」と ‘affix’ (「接尾辞」) の削除と「お」「ご」の移動、初版の接尾辞の記述の整理である。これらについては、2.2.2 と 2.2.3 で述べる。

複合名詞の語構成については、初版・第2版ともに、複合名詞を構成する四つの規則が挙げられており、この箇所は、表記の変更 (例 ‘Aka-gane’ から ‘Akagane’ に) と句読点の変更があるのみである。そのあとは、初版では連濁の説明が続く。第2版では、連濁の説明のあとに複合名詞の前要素末の母音変化 (例「さかて (酒手)」) が追加された。

初版でも第2版でも、「高さ」などの派生名詞についての記述がない。『文語文典』では、時期の近い初版 (1872年) から派生名詞が扱われ、さらに第2版では一つの節を使った記述がある。『口語文典』では、第4版になって ‘Derivative Nouns.’ (「派生名詞」) の節が追加される。

2.2.2 「接頭辞」「接尾辞」から「小辞」へ

初版では節の題名でもあった「接頭辞」と「接尾辞」は、第2版では題名からも本文からも削除される。初版でも、接頭辞の「お」と「ご」(「御」) は、小辞とみなされていたことが、‘O and go are prefixed to nouns as honorific particles.’ (「オとゴは尊敬の小辞として名詞に前置される。」 p. 6、筆者訳) という一文から窺える。一方、性を表すとされる「お」「め」(「おうし (牡牛)」「めうし (牝牛)」) は、これらを名詞に前置する (prefixing) とあるだけである。

そして第2版では、節名が「接頭辞」から「性」になる。まず、扱われた語は、敬語の「お」と「ご」が削除され、「お」「おん」「め」「めん」のみになる。その記述では、日本語では性の区別が基本的にないことと、これらによって性別が表されることが、初版より明確な形で述べられる。そして、語構成の記述では、接頭辞が削除される。第2版には、初版と同じく ‘the gender may be denoted by prefixing *o* or *on* for the masculine and *me* or *men* for the feminine.’ (「性は、男性にはオあるいはオンを、女性にはメあるいはメンを前置することによって示される。」 p. 8、筆者訳) とある。そして、第4節で小辞が前に置かれるか後に置かれるとあるので (初版 p. 6、第2版 p. 8)、この箇所も性を表す「お」や「め」などは小辞であり、名詞に前置されることを述べていると考えられる。それゆえ、「接頭辞」という分類はなくなったと見ることができる。

さらに、第5節から削除された「お」と「ご」の分類も接頭辞の解消を示す。「お」と「ご」は、第2版第6章第78節で、初版と同じく ‘honorific particle’ (「敬語の小辞」) とされる

(p. 63、64)。それゆえ、初版の接頭辞は、第2版で名詞に前接する小辞として統合されたということになる⁴。

「接尾辞」も弱い概念である。初版第6節は題名が「接尾辞」であっても、その下にある「は」は‘a sort of definite article’（「定冠詞の一種」）、「が」は‘an indefinite article.’（「不定冠詞」）、「the sign of the nominative case’（「主格の印」）とされる（初版 p.6）。その他の助詞にも‘affix’という用語は用いられていない。そして、第2版では、2.2.3で述べるように、「は」と「が」は小辞とされ、そのあとの記述（「の」以降）でも、初版同様、接尾辞という用語はない（また、小辞ともされていない）。それゆえ、第2版では、「接尾辞」もまた、解消されたことになる。

2.2.3 初版の「接尾辞」の整理

第2版第6節から第12節まででは、初版の「接尾辞」が整理される。まず、初版第6節の末尾にある「ら」「がた」「ども」は、第2版では第6節、つまり助詞の記述の直前に置かれる。この変更は、日本語の語順（例えば「あなた がた は」）に従った配列への変更と見ることができる。ただし、それを明確に示す例文等は見当たらなかった。

第7節以降での助詞の記述は、変更は多くないとはいえ、整理される傾向にある。初版で冠詞の機能も持つ（初版 p.6）とされた「は」は、‘a distinctive and separative particle’（「示差的・分離的小辞」）（p.9）と、文法的機能に重点が置かれた記述になり、小辞の一種としての位置づけも明確になった。不定冠詞の機能もある（初版 p.6）とされた「が」は、「の」の下で所有格と主格を表すとされる（p.10）。その他については、「と」が第9章に移動した以外は、例文の追加があるものの、各語の意味・用法の記述は同じである。

2.3 代名詞

2.3.1 人称代名詞

初版と第2版の第3章‘THE PRNOUN.’（「代名詞」）は、いずれも9節構成である（表3）。ただし、第2版では、初版の所有代名詞の節（第12節）の内容が、人を指す代名詞の特徴を述べる第17節に組み込まれた。その主旨に変更はなく、所有代名詞は人代名詞と同じ（p.9）ということが述べられている。

表3 『口語文典』初版と第2版の第3章の構成

初版第3章		第2版第3章	
§8	〔一人称の代名詞〕*1	§14	〔一人称の代名詞〕
§9	〔二人称の人代名詞〕	§15	〔二人称の人代名詞〕
§10	〔三人称の代名詞〕	§16	〔三人称の代名詞〕
§11	〔人代名詞の特徴〕	§17	〔人代名詞の特徴〕
§12	POSSESSIVE PRONOUNS (「所有代名詞」)		
§13	DEMONSTRATIVE PRONOUNS. (「指示代名詞」)	§18	DEMONSTRATIVE PRONOUNS. (「指示代名詞」)
(§14*2)	INTERROGATIVE PRONOUNS. (「疑問代名詞」)	§19	INTERROGATIVE PRONOUNS. (「疑問代名詞」)
(§15*2)	INDEFINITE PRONOUNS. (「不定代名詞」)	§20	INDEFINITE PRONOUNS. (「不定代名詞」)
§16	RELATIVE PRONOUNS. (「関係代名詞」)	§21	REFLEXIVE PRONOUNS. (「再帰代名詞」)
		§22	RELATIVE PRONOUNS. (「関係代名詞」)

*1 題名のない節には、筆者が概要を〔 〕で示した。

*2 節番号が脱落していると思われる箇所。

出典 Aston (1869, 1871) から筆者作成

前置きとして、人を指す代名詞の用語について述べておく。現代の文法学説では、人を指す代名詞を「人称代名詞」とし、指示代名詞や疑問代名詞と対立させる考え方（例えば日本語記述文法研究会（編）（2010: 105））があり、おそらくそれが主流だろう。しかし、アストンの文法では、人を指す代名詞の用語が一定しない。そこで、「人称代名詞」は、現代の日本語文法に沿って、アストンの文法に対して中立的な術語として用いる。

初版と第2版の内容を比較したところ、人称代名詞の用語に変化があった。また、各人称の代名詞の記述では、一人称と二人称で、話し手と指示対象である人物との社会的関係の記述が加筆されていた。以下、この順で述べ、最後に第2版第17節について触れる。

まず人称代名詞の用語についてである。どちらの版でも、現代の「人称代名詞」、つまり人を指す代名詞の総称は‘personal pronoun’（「人代名詞」）である。この「人代名詞」は、初版でも第2版でも、『文語文典』初版のように節の題名として用いられるわけではない。しかし、‘Generally speaking, the use of personal pronouns is much more limited in Japanese than in English.’（「概して、日本語では、人代名詞の使用が英語よりはるかに限られている」初

版 p. 9、第2版 p. 14、筆者訳) とあることから、「人代名詞」を総称と見ることができる。

そして、人代名詞の記述には、2種類の用語がある。‘pronoun of the first person’のような、いわば「X人称の代名詞」型と、‘personal pronoun of the second person’のような、「X人称の人代名詞」型である。初版の第14節から第16節では、‘the pronoun of the first person’、‘the personal pronoun of the second person’、‘the pronoun of the third person’ (p. 8) が用いられている。そして、第13節の「あの」「あれ」についての記述中に、‘the personal pronoun of the third person’ (「三人称の人代名詞」、pp. 9-10) とある。まとめれば、「一人称の代名詞」と「二人称の人代名詞」、「三人称の代名詞・人代名詞」となる。第2版では、この「三人称の人代名詞」が削除され、‘the pronoun of the first person’ と ‘the personal pronoun of the second person’、‘the pronoun of the third person’ と、二人称のみが「人代名詞」となる(第2版 pp. 13-14)。そしてこれは第4版でも変更されていない。つまり、『口語文典』の人称代名詞の体系は、「一人称・三人称の代名詞」と「二人称の人代名詞」である。

これは『文語文典』と対照的である。『文語文典』初版では、すべての人称に「X人称の代名詞」が用いられる(p. 21-23)。そして第2版では、‘personal pronouns of the first person’ (p. 56) ‘personal pronouns of the second person’ (p. 61)、‘pronouns of the third person’ (p. 66) と、一人称と二人称に「人代名詞」が用いられる。この一見不均衡な体系は、三人称の代名詞が実際には指示代名詞である(p. 66) という記述と整合しており、人代名詞と指示代名詞が組み合わされた体系が窺える。

しかし、『口語文典』のいずれの版でも、「X人称の代名詞」と「X人称の人代名詞」の違いを示す箇所がない。「三人称の代名詞」については、初版で指示代名詞「あれ」が「三人称の人代名詞」と同じ(p. 9) という明示的な記述があり、第2版でも、三人称の代名詞と指示代名詞の「あれ」を別語と読むことはできない。それゆえ、「三人称の人代名詞」ではなく「三人称の代名詞」が用いられたことには、『文語文典』第2版と同じ合理性があると思われる。しかし、なぜ一人称と三人称に同じ用語が用いられ、二人称と異なるのだろうか。その理由を示す箇所は発見できなかった。

これを、アストンが personal pronoun(s) と pronoun(s) を厳格に使い分けていなかったことに帰することもできるかもしれない。『文語文典』第2版でも、‘personal pronoun of the second person’ と ‘the pronoun of the second person’ が混在しているところがあるからである(p. 61-62)。しかし、大きな改訂が加えられた第4版で訂正されていない理由は不明である。

次に、各人称の記述を比較する。「一人称の代名詞」に分類された語は、初版が「わたくし」「わし」「おれ」のみだったのに対し、第2版は「わたくし」(複数形[わたくしども])、「おれ」[おれら]、「わたし」「わし」「てまえ」である。そして、これらの語の記述の視点は、初版より明確である。初版では、これらの語が普通の語かそうでないかという、いわ

ば頻度の視点からの記述だった。第2版では、誰が誰に話すときに用いられるかという、社会的関係の視点からの特徴が加えられる。例えば、「てまえ」は、‘the lower classes of Yedo’（「江戸の下層階級」）から‘the superiors’（「上位者」）に話すときの語とされる（p. 13）。この視点は、初版の二人称の人代名詞の記述にあるので、第2版で一人称にも適用したと見ることができる。

「二人称の人代名詞」として扱われた語は、「あなた」[あなたがた]、「おまえ」[おまえがた]、「おまえさん」、「きさま」、「てまえ」、「きみ」、「先生」、「だんな」、「だんなさま」で、複数形と「てまえ」が追加された（pp. 13-14）。これらの語の記述は、例文が4例追加されたという違いはあるものの、基本的に同じである。変更点は、「おまえさん」が「あなた」より親しげな語であるという記述である。初版でも、話者と相手の社会的関係が記されているので、第2版の変更はそれを拡張したことになる。

「三人称の代名詞」は、扱われた語も内容も増加している（pp. 14-15）。初版では「あれ」「あのひと」のみだったのが、第2版では「あれ」[あれら]、より丁寧な形式として「あのひと」「あのおかた」「あの女」が挙げられ、複数を作る「がた」も追加された。また初版になかった、性別に関する記述が追加された。「あれ」には性別はないとされるものの、「あのひと」は男性にも女性にも用いられること、「あのお方」は男性に対して、「あの女」は女性に対して用いられることが記された。

最後に、第17節（pp. 14-15）は、初版の第11節を改訂したもので、人称代名詞の文法についてである。初版と比較すると、代名詞の文法は名詞と同じであり、小辞を従えるという記述は変わらない。また、日本語の人代名詞は使用が限定されていることと、人代名詞の過剰な使用を戒めていることも、表現に若干の違いがあるものの、変更はない。一方、人称代名詞の数と性の記述が削除され、所有代名詞（初版第12節）が追加されている（所有代名詞の記述は、例が追加されたこと以外、初版からの変更はない）。

2.3.2 指示代名詞

第2版第18節に指示代名詞の記述がある（pp. 15-16）。扱われた語は、初版と変わらず、「これ」「この」「それ」「その」「あれ」「あの」である。また、「これ」「この」に‘this’、「それ」「その」「あれ」「あの」に‘that’があてられたことにも変更はない。また、「これ」「それ」「あれ」が単独で使え、「この」「その」「あの」は名詞の前に置かれるという記述にも変わりがない。

改訂されたのは、まず、「これ」がフランス語‘ceci’に、「この」は‘ce’、‘cette’、‘ces’に対応するという記述である。しかし、他の指示代名詞にはフランス語の記載がなく、アストンがなぜここだけフランス語を記載したのかは不明である。

重要な改訂は三つある。その一つが、指示代名詞と人称の関係である。『文語文典』第2

版に見られる指示詞の人称区分が、『口語文典』第2版で現れている。初版では、「この」「これ」(以下、コ系)と「その」「それ」(以下、ソ系)と人称との関連付けは見られない。また、「あの」「あれ」(以下、ア系)も、‘*Are is the same word which is used for the personal pronoun of the third person.*’ (「アレは、三人称の人代名詞として用いられる語と同じである。」初版 pp. 9-10、筆者訳)と、人代名詞と指示代名詞に同一語が用いられることが述べられただけである。

それに対し、第2版では、‘*Sore, sono is the demonstrative pronoun of the second person; are, ano of the third person.*’ (「ソレ、ソノは、二人称の指示代名詞である。アレ、アノは三人称の指示代名詞である。」 p. 16、筆者訳)と、ソ系が「二人称の指示代名詞」、ア系が「三人称の指示代名詞」と位置づけられている。ただし、コ系と人称代名詞の関連についての記述はなく、「一人称の指示代名詞」を欠いている。

指示代名詞と人称との関連付けは、アストンの代名詞の記述の特徴である。古田(2010a)が論じているように、『文語文典』第2版で指示代名詞すべてに人称の区分が設けられるに至る。その背後には、どのような考えがあったのだろうか。今回の対象である『口語文典』初版と第2版から、その可能性として考えられるのは、アストンが考える代名詞の体系と、人代名詞と人称の関係である⁵。『口語文典』初版に見られるように、人を指す代名詞は「人代名詞」であり、指示代名詞や再帰代名詞等とともに代名詞の体系を形成する。そして、一人称・二人称・三人称という人称の区分は、人代名詞と独立した概念であり、代名詞の下位分類と交差分類を作ることができる。英語では、所有代名詞と再帰代名詞にも人称の区分を設けることができるからである。それを発展させれば、日本語で人代名詞以外の代名詞に人称の区分を付けることは可能である。それを支えるのが、上記引用箇所に見られるような、指示代名詞と人代名詞の指示対象の近接性であろう。ただし、ア系については明示的な証拠がない。この可能性はさらなる検討の余地があるだろう。

重要な改訂の第二は、照応用法と間投詞的用法の記述である。以下は初版と第2版の該当箇所である。

[初版]

Ano, are, that, are only used of persons or things not actually present, and are opposed to some[sic] and sore, which refer to something present before the speaker. (アノ、アレ、すなわち that は、現前にはない人やものごとについてのみ用いられ、話者の前にいるものを指す、ソネ [ママ] とソレと対立する。)

(『口語文典』初版 p. 9、筆者訳)

[第2版]

Sore, sono refer to something present before the speaker's eye; are, ano to something a little way off, not in sight. (ソレ、ソノは、話者の目の前にあるものを指し、アレ、アノは、やや離れたもの、見えないものを指す。)

Sore, sono refer to the immediate subject of conversation; *are, ano* to something else. *Sono mūma* for instance, means ‘that horse’ *i.e.*, the horse you are riding, or which you have bought, or which we are speaking of. (ソレ、ソノは、会話の当面の主題を指し、アレ、アノはその他のものごとを指す。つまりソノムマは that horse を意味する。つまり、今乗っている馬や買った馬、話題にしている馬である。)

A Japanese often begins a sentence with an *ano*, which has no meaning whatever, and which serves to draw the attention of the person addressed. (日本人はしばしば、アノで文を始め、そのアノは、取り立てて意味はなく、話し相手の注意を引くために役立つ。)

(『口語文典』第2版 p. 16、筆者訳)

そして、第三に、上記の引用箇所にあるように、ソ系とア系の対立も変わる。初版では、ソ系とア系の違いは、話者の前にあるかないかだった。第2版では、ソ系とア系の対立は3種類ある。第一は、眼前にあるもの(ただし、それがどこにあるかは特定されない)と、やや離れたものという指示対象との距離、すなわち空間的位置の対立である。第二は、初版と同じく、見えるものと見えないものの区別である。第三の対立は、会話の当面の主題かどうかである。

2. 2. 3 疑問代名詞と不定代名詞、再帰代名詞、関係代名詞

疑問代名詞 (interrogative pronouns) として扱われた語は、「だれ」「どなた」「どれ」「どの」「なに」で、第2版での変更はない。文法や意味の記述は、表現に改訂はあっても主旨は変わらない。

第20節の不定代名詞の記述 (pp. 17-19) では、「なにぞ」(縮約形「なんぞ」)とその英訳 ‘something or another, any’、例文一つが追加された。これ以外、扱われた語に変更はない。また、疑問代名詞に「か」「も」「でも」が後続すると不定代名詞になるという記述も同じである。

第21節は、再帰代名詞の節で、第2版で新たに加えられた (p. 16)。そこで記述されたことは3点ある。「自分」が最もよく用いられる再帰代名詞であること、「自身」も用いられること、‘each other’ と ‘one another’ に相当するのは副詞「互いに」であること、である。第22節は、表現の変更が一箇所ある以外、変更はない。

3. おわりに

本稿では、アストンの『口語文典』初版と第2版を比較し、名詞と代名詞の記述の改訂について述べた。以下、要点をまとめる。

名詞の記述の改訂は、名詞の前接要素と後接要素についての加筆修正であった。初版の「接頭辞」と「接尾辞」は、第2版では「小辞」に統合された。初版の接尾辞は、現代の用語で言えば複数を表す接尾辞と助詞から成り、その配列もこの順序、すなわち日本語の語順に従ったものとなった。そして、助詞の記述は、「は」を「示差的・分離的小辞」とするなど、文法機能が重視されるようになった。

代名詞の記述を検討したところ、人称代名詞と指示代名詞には大きな改訂があり、疑問代名詞・不定代名詞・再帰代名詞・関係代名詞の記述に主旨の変更はなかった。

人称代名詞の記述では、総称は「人代名詞」で、変更はない。しかし、各人称の用語には違いがある。初版では、一人称は「代名詞」、二人称は「人代名詞」、三人称は「代名詞」「人代名詞」であった。第2版では、一人称と三人称が「代名詞」、二人称のみ「人代名詞」となった。そして、人称代名詞各語の記述を比較し、社会的関係の記述が増えていることを示した。

指示代名詞については、まず第2版で新たに「二人称の指示代名詞」「三人称の指示代名詞」という位置付けがなされていることを明らかにした。そして、指示代名詞に人称の区分を設けるというアストンの独創性の背後に、人代名詞と指示代名詞等の代名詞の体系と、代名詞と人称の独立性があった可能性を指摘した。第二に、照応用法と間投詞用法が加筆されたことも述べた。その引用箇所から、ソ系とア系の対立が、初版の指示対象が眼前に存在するかどうかという対立から、指示対象の空間的位置と、指示対象の可視・不可視、会話の主題か否かという3種類に変更されていたことを指摘した。

【注】

- 1 題名の日本語訳は飛田・遠藤・加藤他（2007: 40）に依拠した。
- 2 筆者が調べた限りでは、第3版での修正は、若干の英文の訂正とローマ字表記の修正（‘e’から‘ye’など）のほかは、誤植の訂正や句読点の変更、大文字・小文字の変更などである。
- 3 本稿での引用は、初出ではなく、2010年に出版された論文集に基づいた。古田（2010b、2010c）も同じ。
- 4 ただし、「お」と「ご」は、第4版では‘honorific prefix’（「尊敬の接頭辞」）となる（第4版 pp. 171-173）。
- 5 『文語文典』については、吉田（2021: 119-145）。

【参考文献】

[資料]

- Aston, William George (1869) *A short grammar of the Japanese spoken language*. Nagasaki: Printed and Published by F. Walsh. [大英図書館所蔵]
- (1871) *A short grammar of the Japanese spoken language*. Second edition. Belfast: F. D. Finlay and son.
- (1872) *A grammar of the Japanese written language, with a short chrestomathy*. London: The Office of the “Phoenix”.
- (1873) *A short grammar of the Japanese spoken language*. Third edition. London: Trübner and Co.
- (1877) *A grammar of the Japanese written language*. Second edition. London Trübner and Co., Yokohama: Lane, Crawford & Co.
- (1888) *A grammar of the Japanese spoken language*. Fourth edition. Yokohama: Kelly & Walsh, Limited., Tokio: The Hakubunsha, London: Trübner and Co. Reprinted in Tōru Haga (ed.) (1997) *Corrected works of William George Aston*. Volume 2. Ganesha Publishing Ltd. and Oxford University Press Japan.

[引用文献]

- 青木志穂子 (2018) 『近世・近代西洋人からみた日本語敬語研究—ロドリゲス、ホフマン、アストン、チェンバレンを中心にして』花書院
- 今村志紀 (2018) 「アストン『口語文典』の改訂における内容の推移について」『上智大学文化交渉学研究』6: 25-39 上智大学大学院文学研究科文化交渉学専攻
URL <http://digital-archives.sophia.ac.jp/repository/view/repository/20180314023> 2021年10月26日閲覧
- (2020) 「アストン『日本口語文典』改訂の影響：サトウの『会話篇』例文との一致から」『上智大学文化交渉学研究』8: 33-50 上智大学大学院文学研究科文化交渉学専攻
URL <https://digital-archives.sophia.ac.jp/repository/view/repository/20200310003> 2021年10月26日閲覧
- 加藤信明 (1986) 「アストン『日本口語文典』四版の性格」『上智大学国文学論集』8: 17-31 URL <http://digital-archives.sophia.ac.jp/repository/view/repository/00000003318> 2021年10月26日閲覧
- 金子弘 (2002) 「外国人の日本語文法研究史」飛田良文・佐藤武義 (編) 『文法』現代日本語講座 5 197-217 明治書院
- 杉本つとむ (1999) 『西洋人の日本語研究』杉本つとむ著作選集 10 八坂書房
- 日本語記述文法研究会 (編) (2010) 『現代日本語文法 1』くろしお出版
- 飛田良文・遠藤好英・加藤正信・佐藤武義・蜂谷清人・前田富祺 (編) 『日本語学研究事典』明治書院
- 古田東朔 (2010a) 「コソアド研究の流れ (一)」『日本語へのまなざし 内と外から—国語学史 1』鈴木泰・清水康行・山東功・古田啓 (編集) 古田東朔 近現代 日本語生成史コレクション第3巻 くろしお出版【初出『人文科学科紀要』71 国文学・漢文学 20 東京大学教養学部人文科学科国文学研究室漢文学研究室、1980年】

- (2010b) 「アストンの日本文法研究」『日本語へのまなざし 内と外から—国語学史 1』くろしお出版【初出『国語と国文学』55(8) 東京大学国語国文学会、1978年】
- (2010c) 「アストンの敬語研究——人称との関連について」『日本語へのまなざし 内と外から—国語学史 1』くろしお出版【初出『国語学』108、1974年】
- 吉田朋彦 (2008) 「W.G. アストンの口語文典初版における名詞と代名詞」『城西国際大学大学院紀要』10: 13-32 城西国際大学
- (2021) 「W.G.アストンの『文語文典』における活用しない主要語」の改訂—記述の視点の変化と人代名詞・指示代名詞の体系の再編」『城西国際大学紀要』29(2): 119-145 城西国際大学
- 渡邊修 (1975) 「アストンの日本語口語文典初版；その書誌」『大妻女子大学文学部紀要』7: 101-114 大妻女子大学
- (1982) 「アストン『日本語口語文典』—初版影印」『大妻女子大学文学部紀要』14: 39-63 大妻女子大学
- (1984) 「アストンの日本語口語文典 (3本対校) その一」『大妻女子大学文学部紀要』16: 1-30 大妻女子大学

Development of the Theory of Nouns and Pronouns in W. G. Aston's *A Short Grammar of the Japanese Spoken Language*:
A Comparison of the First and Second Editions

Tomohiko Yoshida

Abstract

W. G. Aston (1841–1911) published the first edition of his book, *A Short Grammar of the Japanese Spoken Language*, in 1869 and the second edition in 1871. This paper reports the development of his theory of Japanese nouns, personal pronouns, and demonstrative pronouns as indicated in the two editions. In the description of Japanese nouns, Aston recognized the categories of “prefix” and “suffix” in the first edition. However, these categories were combined as “particle” in the second edition, and his analyses focused more on the grammatical functions of the particles, especially the particles that occur after nouns. His account of personal pronouns in the second edition of the book showed a change of terminology, and it gave more detailed information on the interlocutors’ social relationships. The revision of the theory of demonstrative pronouns is remarkable. The initial form of this theory that is stated in the second edition of his book, *A Grammar of the Japanese Written Language*, first appeared in the second edition of the book *A Short Grammar of the Japanese Spoken Language*; the Japanese demonstrative pronouns included two subcategories: “demonstrative pronoun of the second person” and “demonstrative pronoun of the third person.” The second important revision is that he added the anaphoric and interjective uses. Finally, he stated that the demonstratives *so* and *a* contrast in terms of the location of the referent, visibility of the referent, and theme of the conversation.

Key words: W. G. Aston, a short grammar of the Japanese spoken language,
Japanese demonstrative pronoun, Japanese personal pronoun